

ローデシア大学

University College of Rhodesia

「ローデシア大学」は、もとの「ローデシア・ニヤサランド大学」(University College of Rhodesia and Nyasaland) のことで、ローデシア・ニヤサランド連邦が解体して、北ローデシアとニヤサランドが「ザンビア」と「マラウィ」として独立し、それぞれ自国に大学を持つようになる以前は、中央アフリカにおける唯一の最高学府であった。

筆者は客員研究員として1963年4月から1965年3月までこの大学に籍を置いたが、そのころはまだ「ローデシア・ニヤサランド大学」(U.C.R.N. と略称される) といっていた。

I 沿革および性格

U.C.R.N. は、連邦成立2年後の1955年2月11日に創立されたが、本大学を設立しようとする動きは、それより10年も前からあった。すなわち、その動きは1945年に篤志実業家 J・F・カプネック (Kapnek) が私財2万ポンド(約2000万円)を投じて大学創立資金としたことに始まる。これに力を得て、南ローデシア下院議員 L・M・N・ハドソン (Hodson) が The Rhodesia University Association を作り、1946年、議会に働きかけて大学設立案を通過させた。翌1947年、南ローデシア総督は Rhodesian University Foundation Fund を設け、当時の内務大臣・次官およびハドソン議員を理事に任命し、政府から10万ポンド(約1億円)の贈与をさせた。他方、大学設立の趣旨に賛同した民間会社なども、1953年までに総計7万4000ポンド(約7400万円)の寄付を行なった。大学用地については、数多い候補地の中から、けっきょくソールズベリー市が所有している3250エーカーの土地が理事によって選定された。こうして、1955年から大学の授業が開始され(会計上は1952年から)、1957年には「文学部」(Faculty of Arts)と「理学部」(Faculty of Science)ができ、1958年には「農学部」(Faculty of Agriculture)が設置された。その後1962年に「社会科学部」(Faculty of Social Studies)、1963年からは「医学部」(Faculty of Medicine)が併置されて、文字どおり総合大学の形態を整えるに至った。

U.C.R.N. の性格や運営方式は、この国が長らくイギリスの自治植民地であったことから当然考えられるように、すべてイギリス流であった。ことに、学問上の系統としては「ロンドン大学」との連携が強く——医学部は「パーミンガム大学」と直結している——、本大学で取得した学位は、「ロンドン大学」(または「パーミンガム大学」)のそれと同一視された。かくて、U.C.R.N. は、創立以来、アフリカ諸国の中では学問的水準の高い錚々たる教授陣を擁し——ある分野では世界的学者もいる——、人種のいかに問わず、幾多の人材を育ててきた。しかし、大学の発展がようやく軌道に乗ろうとしていたやさき、「連邦解体」という事態が起こり、それは大学の将来に決定的な影響を与えることとなった。従来 U.C.R.N. は設立資金についてはイギリス政府から、維持運営費については連邦政府から財政援助を受けてきたが、連邦解体後は、ローデシア政府だけでは年間約100万ポンド(約10億円)にのぼる維持費を継続的に負担することができなくなったのである。その上、マラウィとザンビア両黒人政府は、ともに自国に国立大学新設を発表し、白人国家にある U.C.R.N. を無視する宣言をした。この結果、大学当局はその財政面について、イギリス政府に救いの手を求めたが、イギリス側は、すでに Colonial Development and Welfare Fund を通じて多額の資金を供与しており、そのうえさらに維持運営費まで新たに負担することに関しては非常な難色を示した。このため、ローデシア側から C・E・M・グリーンフィールド (Greenfield) 蔵相と W・アダムス (Adams) 学長、イギリス側から N・D・ワトソン (Watson) 英連邦次官の3人からなる委員会を構成して、大学財政の将来について検討を重ねたのである。しかし、この問題は、ローデシア政府が1965年11月に「一方的独立宣言」を行なったことによって、ネガティブに解消されたことはいうまでもない。

この大学の性格として、連邦時代から重要なことは、学内では「人種差別」をしないことをモットーにしていた点であろう。学内では、アフリカ人も、ヨーロッパ人も、またアジア人(ほとんどインド人だが)も、同じ部

屋に寝起きし、同じ浴場を使い、共に学問を語り、一緒にスポーツを楽しむ。形式的にはともかく、実質的には、まだ「人種差別」が根強く残っているローデシアでは、本大学は、いわば「最後の良心の砦」であった。したがって、連邦解体後のスミス政権のゆくえは、とりもなおさず大学自治にとって、「暗い時代への突入」を意味した。「一方的独立宣言」に対する教授団の強硬抗議と、「マルレケ事件」をめぐる学長の辞任決意とは、その不幸な事例なのである。前者は、「一方的独立宣言」に際して政府から求められたある教授の公式意見が、アフリカ人に対して好意的過ぎるという理由で屠られた事件に端を発し、その後大学教授団がスミス政府に対して強硬な抗議文を提出したものである。後者は、1 アフリカ人学生が、民族主義運動の推進者であり、また労働組合の指導者であるという理由で、警察当局が、学内に潜入して本人の身柄引渡しを要求したのに対して、学長がこれを拒否したため、学長辞任問題にまで発展したものである。

II 機 構

総長にエリザベス女王、大学評議会議長にマルヴァーン卿（ハギンス元首相）をいただいているが、實際上の大学運営最高責任者は、W・アダムス学長である。かれは60歳の歴史学者で、長身、瘦軀、眼光炯々たる風貌からはやや近寄り難い感じを受けるが、親しく話し合ってみると、まことに温厚な紳士である。「マルレケ事件」で示されたその峻烈な態度は、かれが長年にわたってアジア・アフリカ諸国における大学新設問題に情熱を傾けてきた実績と自信に裏付けられているものと思われる。学長を補佐するものとして副学長——筆者が滞在当時はS・H・ハーパー（Harper）教授であった——がおり、その下に、アドミストレイティブ・スタッフ、アカデミック・スタッフおよびライブラリーがある。以下は、そのうちアカデミック・スタッフだけを学部別に示したものである。

I 文 学 部 (Faculty of Arts)

1. アフリカ語学科 (African Languages)
2. 古典学科 (Classics)
3. 英語学科 (English)
4. 歴史学科 (History)
5. 近代語学科 (Modern Languages)
6. 神学学科 (Theology)

II 社会科学部 (Faculty of Social Studies)

1. アフリカ社会人類学科 (African Studies)
2. 経済学科 (Economics)
3. 統計学科 (Statistics)
4. 政治・行政学科 (Government)

III 教育学部 (Faculty of Education)

1. 教育学科 (Education)
 - (i) 教育研究所 (Institute of Education)
 - (ii) アフリカ成人教育研究所 (Institute of Adult Education)

IV 理学部 (Faculty of Science)

1. 農学科 (Agriculture)
2. 植物学科 (Botany)
3. 化学科 (Chemistry)
4. 地質学科 (Geology)
5. 数学科 (Mathematics)
6. 物理学科 (Physics)
7. 動物学科 (Zoology)

V 医学部 (Faculty of Medicine)

1. アフリカ医学科 (Medicine with Special Reference to Africa)
2. 予備臨床学 (Pre-Clinical Studies)
3. 解剖学科 (Anatomy)

アカデミック・スタッフは、1965年現在で Professor, Lecturer, Research Fellow を含めて、総数110人であり、そのほとんどすべてがヨーロッパ人であった。アフリカ人は、例外的に、経済学科 Lecturer の S・B・エンコボ (Ngcobo) と、「アフリカ成人教育研究所」研究員の M・A・ワカタマ (Wakatama) の2人だけである。学生数は full-time, part-time を合わせて、639人であり、そのうち約3分の2が白人——その中にはごく少数のアジア人も含まれる——、残りの3分の1が黒人という割合であった。学部は、以上で明らかなおと、五つあるが、本大学の機構として特色があるのは、「教育学部」に付属する二つの研究所と、「社会科学部」のアフリカ社会人類学科とであろう。前者は、広く一般人教育の理論と実践とを研究する「教育研究所」と、アフリカ人教育の方法を実験している「アフリカ成人教育研究所」とをさす。これらは、低開発国のマン・パワーの重要性に鑑みて特に設置されたもので、その有効性はすでに証明済みである。また後者は、なるほど植民地政策と平行して発展してきたものとはいえ、前人未踏の中央アフリカ内陸部における貴重な実態調査に基づく成果は学界でも

高く評価されている。いまのザンビアのルサカ(Lusaka)にある「ローズ・リヴィングストン研究所」(Rhodes-Livingstone Institute)は、連邦解体まではU.C.R.N.の付属機関であって、その社会人類学上の業績はきわめてユニークなものであった(ザンビア独立後は新設のザンビア大学に吸収された)。

なお、本大学の付属図書館は、創立の翌年に建設されたが、これは外観ばかりでなく、内容も第1級のものである。蔵書数は、1964年現在で、単行本約9万冊、定期刊行物約2500種に及んでいる。——ちなみに、アジア経済研究所の蔵書数が同年次に、単行本約4万7000冊、定期刊行物約1200種程度であったことと思えば、その整備状況がいかにすぐれていたかがわかれる。英米ではLibrarianの地位がきわめて高いと聞いてはいたが、ここでもD・H・ヴァーレイ(Varley)館長以下10人近くのスタッフが日夜資料の整備と保存に努力していたのが、たいへん印象深かった。筆者の滞在中、研究に必要な資料はたいへんここで閲覧することができた。ただ惜しいのは、国柄からして、アングロ・サクソン系のものが圧倒的に多く、仏、独、露、伊などの資料は比較的乏しく、またアジア関係——日本をも含めて——に関する資料が少なかったことである。ともあれ、この図書館はまた、アフリカ語学、鉱床学、熱帯医学などについて、他の追隨を許さぬ資料コレクションをもっていたことを付け加えておこう。おもな出版物には、*Directory of Libraries in the Rhodesias*, *Union Catalogue of Periodicals in the Libraries of Rhodesia*などを刊行している。

III 調査研究活動

本大学の研究活動の全学部について述べることはできないから、ここでは、社会科学、それも主として経済学、社会学の分野に限ることとする。

まず、経済学科で、W・L・テイラー(Taylor)はニュージーランド生まれの経済学説史担当の主任教授で、「フェニックス・グループ」(Phenix Group)——ローデシアの代表的エコノミストたちによる研究会——のリーダーでもある。連邦解体に伴う経済問題については、一連の現状分析を行ない、現実関心も並々でないことを示した。1964年来日したが、かれの論文にはしばしば日本経済に関する記述が見られるほど知日家であり、また親日家である。主著には *Reflexion on Economic Role of Education* (1965), *F. Hutcheson and D. Hume as Predecessors of Adam Smith* (1966) などがある。

R・W・M・ジョンソン(Johnson)は、やはりニュージーランド生まれで農業経済学の専攻である。飄々として、屈託のない性格であるが、その学究活動は実に精力的で、発表論文数も学科でいちばん多い。ことに、フィールド・ワークに基づいたアフリカ人農業の精密な分析では定評がある。主著には、*African Agricultural Development in Southern Rhodesia, 1945~60* (1964), B. F. Massell と共著の *African Agriculture in Rhodesia: An Econometric Study* (1966) などがある。

D・S・ピアソン(Pearson)は、低開発国開発問題が専門で、ハーシュマン流の不均衡成長理論をローデシアの現実に対応させて展開した。*The Role of Agriculture in Economic Development* (1964), *Employment Trends in a Developing Economy: The Case of Southern Rhodesia* (1964) などの論文がある。

また、R・コール(Cole)は、オックスフォード出身の若い経済理論家で、著書は少ないが、セミナー等では積極的に活躍していた。

アフリカ人 Lecturer のS・B・エンコボ(Ngcobo)は、南アのズールー族出身だが、ナタール大学を経て、アメリカのイエール大学で Master of Arts の学位をとった。専攻はアフリカ経済で、その主要関心は、農業改革や賃金問題などにあるようだった。セミナーなどでも白人学者に伍して堂々と発言し、その楽天的気質と相俟って、アフリカ人学生の人気を集めていた。

その他、経済学科には、C・パーレイ(Palley), J・G・スコット(Scott), M・P・ワード(Ward)などの講師のほか、アメリカ、ドイツ、イタリア、エジプト、インド等からの Visiting Research Fellow がいた。

経済学科以外では、政治学のF・M・G・ウィルソン(Willson)教授、およびアフリカ人社会人類学のJ・C・ミッチェル(Mitchell)教授、アフリカ語学のG・フォーチュン(Fortune)教授など、世界的に名の知られた学者もいる。

ザンビアに「ザンビア大学」が、マラウイに「マラウイ大学」が新設されるに及んで、「ローデシア大学」の教授陣の一部がそれらに移ったということであるが、詳しいことはわからない。

学内の論文発表は、各学部ごとに“occasional paper”として出されるほか、毎年7月末に開かれる「ローデシア経済学会」(Rhodesian Economic Society)での学会報告は、そのつどタイプのまま配付される。筆者が滞在中の1964年には、「農業と経済発展」なるテーマのも

研究機関紹介

とに次のような内容の報告があった。

- D. S. Pearson, The Rôle of Agriculture in Economic Development.
- E. Osborn, The Compilation of an Input-Output Matrix for Planning Purposes.
- L. Uribe, Economic Factors Determining Agricultural Policy.
- R. W. M. Johnson, Planning with the Input-Output Model.
- A. A. Le Roux, Sample Survey Problems.
- J. C. Mitchell, Sociological Background of African Agriculture.
- T. R. C. Curtin, The Effectiveness of Government Plans.

また、前記「フェニックス・グループ」は、1960年以來、次のような出版物を發表した。

Planning the Development of the Wealth of Three

- Nations: An Examination Economic Possibilities in the Rhodesias and Nyasaland* (1960).
- Independence? A Framework for Economic Progress in Northern Rhodesia* (1961).
- Planning for Progress: An Agenda for Overall Development in Southern Rhodesia with Particular Reference to the Rule of African Agriculture* (1962).
- Break-Up: Some Economic Consequences for the Rhodesias and Nyasaland* (1963).

なお「一方的独立宣言」後、上記スタッフの大部分はスミス政府の干渉により、各地に離散（たとえば、テイラーはフランス、ジョンソンはニュージーランドへ、ピアソンはマラウイへなど）したが、かれらは政治情勢が改善されればふたたびローデシア大学に復歸することを望んでいる。

（調査研究部主任調査研究員 星 昭）

アフリカのナショナリズムの
發展 (I)

穴 戸 寛編
330頁 900

▷総括...穴戸寛▷ナイジェリア...中村弘光▽ケニア...穴戸寛▷コンゴ...山下秀雄▽南ローデシア...山田秀雄▷旧フランス領西アフリカ...勝岡宣



アフリカのナショナリズムの
發展 (II)

穴 戸 寛編
300頁 900

▷総括...穴戸寛▷ウガンダ...穴戸寛▷タンガニーカ...中村弘光▷マダガスカル...勝岡宣▷南アフリカ共和国...山下秀雄▷ポルトガル領アフリカ...古賀十也▷仏領赤道アフリカ...佐藤昌章▷シエラ・レオネとゴールド・コースト...西野照太郎 [付録] 参考文献



ブラック・アフリカの伝統的
社会とその変容

泉 靖 一編
232頁 600

▷低開発地域における文化変動の諸問題...泉靖一▷いわゆる間接統治について...山口昌男▷ニグロ・アフリカにおける伝統的政治組織と植民地支配によるその変化...鈴木満男▷近代経済と種族社会...村武精一▷アフリカ土着民農業...大森元吉▷結婚の法的規制をめぐるニグロ・アフリカの変化...高橋統一▷アフリカ人のウィッチクラウト信仰...大森元吉▷世界観と祖先崇拜...長島信弘・阿部年晴